

米づくいのいろは

令和8年7月4日
倉吉農業改良普及所作成
～穂肥編～

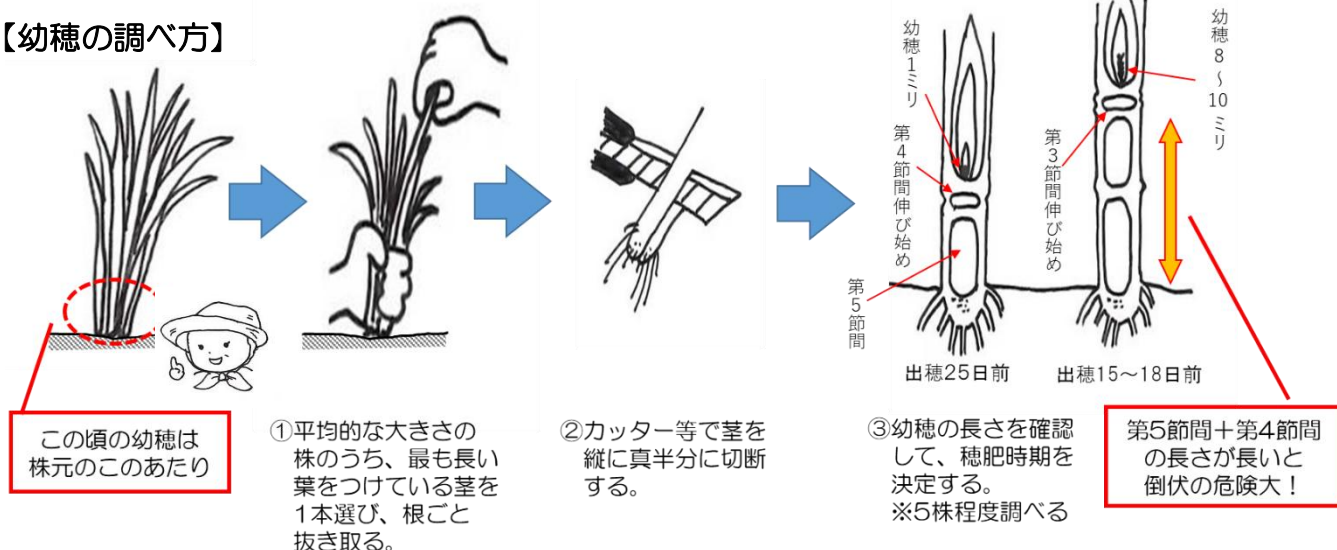
1 適切な穂肥の実施

(1) 穂肥の施用時期の基準

- 第1穂肥の施用時期は、籾数確保と倒伏防止の観点から、幼穂の長さをもとに適期を判断する。
- 第2穂肥は下の表を参考に、第1穂肥から規定の日数が経過した時に施用する。

出穂までの日数	30日前	25日前	18～20日前	15～18日前			0日前
幼穂の長さ	見えない	0.1cm	0.3～0.5cm	0.8～1.0cm	3～5cm	8cm	
イネの外観	第5節間伸長	★幼穂形成期 2葉目出葉直前		止葉出始め		止葉と2葉目 がそろそろ	出穂
穂肥施用時期	ひとめぼれ		第1穂肥	10日後		第2穂肥	
	コシヒカリ			第1穂肥	8日後	第2穂肥	
	星空舞			第1穂肥	7～8日後	第2穂肥	
	きぬむすめ 日本晴		第1穂肥	10日後		第2穂肥	

【幼穂の調べ方】



【出穂日予想（6月15日時点）】

※今後の気象条件により変動する可能性あり(特にきぬむすめ)

- 冷水地帯や山陰げなどでは右表の予想より遅くなる。
- 星空舞はコシヒカリより5日程度遅い出穂、日本晴はきぬむすめより2日程度早い出穂、ハクモチはきぬむすめより4日程度遅い出穂となる。

		予想出穂期				
		4/30田植	5/10田植	5/20田植	5/30田植	6/10田植
ひとめぼれ	0～99m	7/14～16	7/17～19	7/23～24	7/30～31	-
	100～199m	7/17～18	7/20～21	7/25～26	8/1～8/2	-
	200～299m	7/20～21	7/22～23	7/27～28	-	-
コシヒカリ	0～99m	7/18～20	7/22～23	7/28～29	8/4	8/7～8/8
	100～199m	7/21～22	7/24～25	7/29～30	8/5～8/6	8/8～8/9
	200～299m	7/23～24	7/26～27	7/31～8/1	8/8	-
星空舞	0～99m	-	7/27～28	8/2～3	8/8	8/12
	100～199m	-	7/28	8/3	8/8	8/12～8/13
	200～299m	-	7/29	8/3～8/4	8/9	8/13
きぬむすめ	0～99m	-	8/12頃	8/14頃	8/17頃	8/20頃

(2) 穂肥の施用量の基準

- 穂肥の化成肥料 17-0-17 の施用量は、葉色板を用いた葉色診断により、下表を参考に決定する。



＜葉色板による葉色診断＞一番上の開ききった葉を葉色板の1 cm上に重ねて葉色を測定する。

①第1穂肥のポイント

- 第1穂肥は籾数確保する一方、下位節間の伸長にもつながる。倒伏防止のためにも、葉色診断は必ず行う。
- 穂肥適期の時点で基準より葉色が濃い場合、星空舞以外の品種ならば3～4日待って葉色が落ちてから第1穂肥を施用する。待っても葉色が落ちずに濃いままなら第1穂肥は省略する。また、星空舞の場合は、穂肥適期の時点で葉色が濃ければ、待たずに第1穂肥を省略する。
- コシヒカリは葉色だけでなく、全体の生育ボリュームで総合的に判断する。草丈が70 cm以上で、茎数が多い(株間21 cmなら30本以上/株、株間18 cmなら25本以上/株)場合や、下位節間が12 cm以上ある場合は、施用時期を遅らせるか、施肥を省略する。
- きぬむすめは色落ちすると回復しにくいので、葉色が落ち始めた時点で早めに追肥する。

品種	第1穂肥の施用量（化成肥料17-0-17の場合）
ひとめぼれ コシヒカリ	4.0以下なら 15kg/10a → 4.0超過なら3～4日ほど遅らせるか 施用しない
星空舞	4.0未満なら 12kg/10a → 4.0以上なら施用しない
きぬむすめ	4.5以下なら 20kg/10a → 4.5超過なら3～4日ほど遅らせるか 施用しない
葉色板	

②第2穂肥のポイント

- 第2穂肥は登熟を向上させて粒張りを良くする効果がある。
- ひとめぼれやきぬむすめは極端に色が濃くない限り基準量を施用する。コシヒカリと星空舞は第2穂肥も葉色診断をもとに施用量を決める。
- 第2穂肥が遅れると食味が落ちるため、遅くとも出穂5日前までには施用する。

品種	第2穂肥の施用量（化成肥料17-0-17の場合）
ひとめぼれ	4.5以下なら 10kg/10a → 4.5超過なら施用しない
コシヒカリ	3.5以下なら 10kg/10a → 3.5～4.0 6kg/10a → 4.0以上なら施用しない
星空舞	3.5以下なら 12kg/10a → 3.5～4.0 6kg/10a → 4.0以上なら施用しない
きぬむすめ	5.0以下なら 15kg/10a → 5.0超過なら施用しない
葉色板	

注意 第2穂肥は出穂5日前を過ぎたら施用しない

品種	一発施肥体系の追肥判断（化成肥料17-0-17の場合）
ひとめぼれ	4.5以下なら 6kg/10a → 4.5超過なら施用しない
コシヒカリ	3.5以下なら 6kg/10a → 3.5超過なら施用しない
星空舞	原則追肥は行わない ※葉色が極端に濃い場合はご相談ください
きぬむすめ	5.0以下なら 12kg/10a → 5.0超過なら施用しない
葉色板	

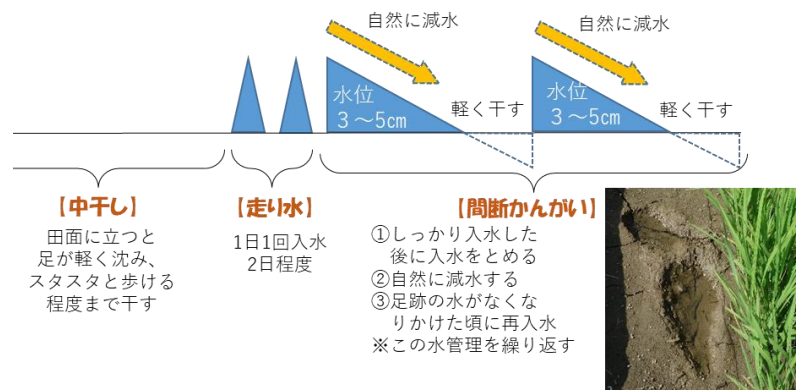
③元肥一発肥料を使用しているにもかかわらず葉色が淡い場合

- 星空舞以外の品種であれば、第2穂肥の時期に葉色診断を行い、追肥の可否を判断する。
- 星空舞の場合は、元肥施用量にかかわらず穂肥は原則行わない。

2 中干し後～落水までの水管理

(1) 中干し後～落水まで

出穂30日前には中干しを終了し、走水した後は基本的に間断かんがいを保つ。常に土が湿り、且つ根に酸素が届く状態とし、根の活力維持と地温低下を図って高温障害を回避する。



(2) 穂ばらみ期～乳熟初期

イネが最も水を必要とする時期。穂ばらみ期～乳熟初期に水分不足になると白穂化する可能性があるため、この時期は水をためて湛水状態にする。

(3) 台風・強風時

強風により葉や穂が擦れると、表面にできた傷から水が蒸散してしまう。その時に根から水が供給されないと白穂化したり、米が白濁する恐れがある。強風が予想される際にはできるだけ深水にして稲を守る。



(4) 落 水

落水が早すぎると米が登熟しきらないうちに根が枯れてしまい、未熟粒の発生を招く。落水はコシヒカリで出穂 30 日後以降、その他の品種で出穂後 35 日後以降を目安とし、最後まで根の活力を維持するように意識する。
ほ場が早く乾きすぎってしまった場合は3～5日に1回程度(3時間くらい)走水を行う。

【 出穂前後の穂の様子 】

穎が1粒でも出たら出穂

出穂期とは、全体の5割程度出穂している時をさす



穂ばらみ



出穂



出穂期



穂ぞろい期



乳熟初期

©2020 鳥取県農業試験場

3 適切な病害虫防除

(1) 出穂前後の基幹防除

収量と品質を確保するため、下記の基幹防除は必ず行う。

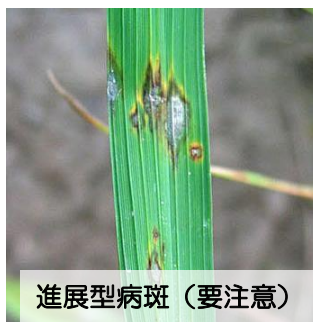
	防除回数	実施時期	薬 剤 名	散布量
粉剤体系	1 回目	出穂直前	ビームエンカットスタークルF 粉剤 5DL	4kg/10a
	2 回目	穂揃い期	ブラシンダソツH 粉剤 DL	4kg/10a
粒剤体系	1 回目	出穂20日～14日前	ゴウケツモンスター粒剤	3kg/10a
	2 回目	穂揃い期～乳熟初期	スタークル豆つぶ	250g/10a

- ラジヘリ防除の時期は上記の表の「2 回目」にあたるため、「1 回目」は各個人での防除を徹底する。
- 本年はカメムシの密度低減を狙うため、粒剤体系の1 回目は「コラトップ粒剤5」ではなく「ゴウケツモンスター粒剤」を選択しましょう。
- 日本晴(飼料用米)は 1 回目の防除のみ行うことを基本とする。2 回目の防除を行いたい場合は、防除の可否や薬剤の選定等を事前に指導機関にご相談ください。
- 病害虫防除を適期に実施するために、出穂前後の穂の様子を把握しておきましょう。

(2) 気をつけたい病害虫

① いもち病

- 穂いもちが多発すると減収に直結する。
- 最も感染しやすいのは出穂直後から穂揃期であるため、1 回目の基幹防除は必ず行う。
- いもち病が発生したら直ちに緊急防除薬剤を散布する。また、水田に水を入れて湛水状態にし、イネの防御態勢を整える。
- いもち病が多発している場合は、穂肥は中止する。



©2020 鳥取県農業試験場

<いもち病の予防薬剤>

薬剤名	本剤の使用回数	使用時期	使用量	使用方法
コラトップ粒剤5	2回以内	出穂30日前～5日前まで	3～4 kg/10a	湛水散布

<いもち病の緊急防除薬剤>

薬剤名	本剤の使用回数	使用時期	使用量
ブラシン粉剤 DL	2回以内	収穫7日前まで	3～4 kg/10a

- 防除後1週間程度しても病斑の進展が止まらないときは、1週間毎に追加防除を行う。
- 緊急防除を行う場合は薬剤の選定について指導機関にご相談ください。

② 斑点米カメムシ類

©2020 鳥取県農業試験場



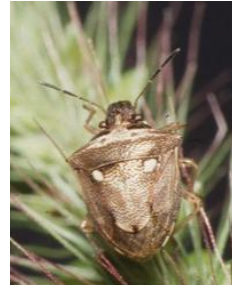
アカゾガミカメムシ
(体長 4.6~6mm)



ホリハリカメムシ
(体長 9~11mm)



クモリカメムシ
(体長 15~17mm)



トゲシロカメムシ
(体長 4.5~7mm)



カメムシによる斑点米

- 上記のカメムシは雑草地で繁殖して出穂後水田に侵入し、籾を吸汁して斑点米を生じさせる。
- 斑点米が多発すると等級落ちするため、2 回目の基幹防除は必ず行う。また、畦畔の草刈りはこまめに行い、カメムシを寄せ付けない環境をつくる。特に出穂前後は畦畔雑草が穂をつけないタイミングで草刈りするとよい。
- イネの出穂後に穂のついた畦畔雑草を刈ると、畦畔にいたカメムシを水田に追い込んでしまう。その場合は防除直前のタイミングを狙って草刈りするか、イネのもみが固くなってつぶしても汁が出なくなる頃まで草刈りを待つ。

イネカメムシが県内広域で確認されています

- イネカメムシは出穂期のイネを吸汁し、籾を不稔にする。また、乳熟期以降の加害では基部斑点米を生じさせる。
- 県西部を中心に多発しているが、東・中部でも昨年より発生が増えている。
- 発生抑止のため穂揃期～乳熟初期の防除を徹底する。
- 特に、周囲よりも出穂期が大きくずれるほ場は要注意。イネカメムシの発生が多くなりやすい場合は、出穂期頃に 1 回目、穂揃期～乳熟初期に 2 回目の防除を行う。



©2020 鳥取県農業試験場

イネカメムシ
(体長 13mm 程度)



基部斑点米



吸汁加害による不稔

③ トビイロウンカ(秋ウンカ)

©2020 鳥取県農業試験場



トビイロウンカ (成虫)



イネ株元のトビイロウンカ (幼虫)



水田の坪枯れの様子

- 毎年梅雨時期に中国大陸から飛来してきて、畦畔や水田内で増殖する。国内では越冬できない。
- トビイロウンカはイネの株元を吸汁し、密度が高くなると、9~10 月頃に坪枯れを引き起こす。
- イネの株元を観察して一株あたり 10 頭以上トビイロウンカがいる場合や、坪枯れが発生した場合は、下記のいずれかの薬剤で防除を行う。なお、収穫が近い場合は、早急に収穫する。

<トビイロウンカの緊急防除薬剤>

薬剤名	本剤の使用回数	使用時期	使用量
トレボン粉剤 DL	3回以内	収穫7日前まで	3～4kg/10a
スタークル粉剤 DL	3回以内	収穫7日前まで	3kg/10a

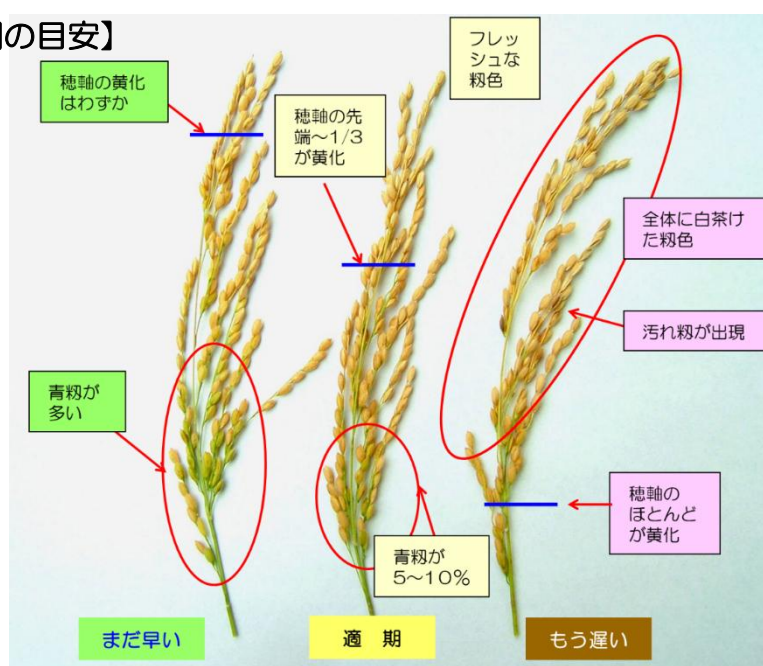
4 適期収穫の実施

刈取りが遅れると胴割粒、白濁粒、着色粒の発生を助長するだけでなく、食味を低下させてしまうため、適期を逃さないように計画的に刈取りを行う。

(1) 収穫適期の目安

品種	青粃の割合	出穂日からの積算温度	穂軸の熟れ
ひとめぼれ	1 穂全体の 5%程度	1000℃	先端から 1/3 が黄化
コシヒカリ	1 穂全体の 10%程度	1000℃	先端だけが黄化
星空舞	1 穂全体の 10%程度	1000℃	先端から 1/4 が黄化
きぬむすめ	1 穂全体の 10%程度	1050℃	先端だけが黄化

【収穫適期の目安】



鳥取県農業試験場作成画像を改変

(2) 刈取り時の留意事項

- 倒伏により穂発芽が心配される水田は、やや未熟であっても早めに刈り取る。
- 異品種の混入を防ぐため、刈取りの品種が変わる時には掃除を行う。特にもち米とうるち米が混入すると致命的となるため、掃除を徹底する。

<収穫が遅れると外観品質が低下する>

コシヒカリの収穫時期について、品質の観点で調査したところ、出穂期後積算気温1,000℃で最良となることがわかりました。



収穫時期の差はわずか4日!!